

映画の小箱

自然に身をゆだねるようにして暮らしたリトンと隣人ガリス。リトンの娘クリクリの心には、四季のうつろいと人間模様が、今も宝石のようにきらめいている。

『クリクリのいた夏』

金丸弘美=文
text by Hiromi Kanamaruフランスののどかな四季を
背景に、静かに描かれる人生模様

四季の色彩のなんと豊かなことだろう。自然が育んだ色合いの見事なこと。自然の生物のリズムと登場する人の生き方が調和して、美しいアンサンブルをみせる。

山林の中で可憐に咲いたスズランを摘む男ガリス（ジャック・ガンブラン）の姿から始まる。彼の手から羽ばたくてんとう虫が、五月の季節を歌い上げるようだ。

ガリスは、林を出て、川辺に寝をべつていた少し腹の出た髪が薄くなった男に声をかける。彼は、スズランを摘みかけて途中でやめてしまい、川で冷やしたガリスの分のワインを飲み干してしまっただけ。男の名はリトン（ジャック・ヴィユレ）。スズランがなかったこと、ワインをつい飲んでしまったこと、いいわけをする。ガリスは、「またか」というような顔をして、リトンをうながし、町に出かけるのだ。

この二人を中心に、多彩な人々の人生と、美しいフランスの四季が広がっていく。

出だしの自然描写も素敵なのだが、主人公二人が町を訪れ、多くの人たちと接するなかで、浮かび上がる人生模様と季節の移り変わりが、また素晴らしい。

ガリスとリトンは、田舎町のマレの沼地の小さな家に住んでいる。ガリスは一人暮らし。戦争で心に傷を負って村にやってきた。そして自給自足の生活を始めたのである。お隣りのリトンは、妻と小さな女の子クリクリ（マルレーヌ・バフィエ）と暮らしている。

一九三〇年代のフランス。リトンの娘クリクリの胸に秘められていた思い出として語られる物語は、まるで宝石のようだ。

ガリスとリトンが摘んだスズランは、小さな花束にして町で売るのである。花売りとは別に、ガリスとリトンは、各家を巡り『五月の歌』を歌う。二人が歌うのは、季節を告げ

る歌らしい。歌うとお金をくれるのだ。

ガリスとリトンには定職がない。スズランを売ったり、個人の家の庭のバラ栽培の仕事やひきょうけたり、エスカルゴを捕ったり、季節の仕事が自然に生まれてくる。湖の四季の自然の中に生き、自分たちの生活をまるで自然の中からつむぎだす暮らしが、美しい四季の景色と溶け合い、とても心地良く伝わってくる。

なかでも面白いのがエスカルゴ捕りだ。大雨の後、ガリスは「こんな雨の日はエスカルゴが捕れるぞ」と叫ぶ。翌日、バラ好きの老婦人に思いを寄せる、本と音楽好きのロマンチストのアメデ（アンドレ・デュソリエ）に、「一緒に行きたい」と頼まれ、三人で出かける。待ち合わせは駅。ガリスが機関士に頼みこみ、貨物車に籠もって乗る。そして機関車が山の斜面にかかると、機関士が合図を送る。三人が飛び降り、山林に入ると、木々にエスカルゴがいるのだ。捕獲すると、線路に行き、戻ってきた機関車に飛び乗って町に帰り、市場で売るのである。そこに出てくる牧歌的な情景、機関士の思いやりと、人の繋がり。なんともいえない温かさと触れ合いが伝わってくるのである。こんな美しい描写を交えなが



